

## 論 說

三二

空間の彎曲 特殊相對性原理は、或意味に於て、力の作用せざる場合に於ける自然法則を研究するものと云ふ事が出来る。一般相對性原理に於ては、更に力の作用をば、観測者又は座標系が有する加速度と云ふ觀念で置き換へ得る事を示して居る。然らば則ち運動を變化する原因である所の力と云ふ觀念を取り去つて、單に運動の要素たる速度や加速度の組合せのみに由つても自然現象を解釋するに支障ない譯である。力と運動との關係を論ずる者は力学である。速度や加速度の合成分解を論ずるものは運動學である。運動學とは時間空間に關する幾何學である。普通の空間幾何學と大差のない形式科學としての一種の數學である。故に相對性原理は一面に於て數學的自然觀の可能を説くものであると考へる事が出来る。

數學的自然觀の下に於ては、力の觀念は絶対でない。且つ力の觀念に換ふるに空間に對する新觀念を要求するのである。吾人は先きに遠心力の條に於て、観測者が圓運動をなす場合に於ては、観測者に働く遠心力と求心力とが釣合つて、力が全く働かないと同じ事であると云ふ事を述べた。同様に地球が太陽の周圍を公轉する場合に於ても、太陽と地球との間に働く萬有引力は、地球の遠心力と釣合つて居るのである。己に力の作用を知らない。又地球の運動をも意識しない。斯うした狀態の下に於ても地球が猶橢圓運動をして居るとなれば、其は空間の性質が地球を斯くの如く導いたものと解してもよい譯である。即ち空間が彎曲して居るからであると解してもよいのである。山路を行く者は、一直線に登攀するよりも羊腸の小徑を辿つた方が容易である。ボテンシャル論と云ふ一種の數理も、或特定の道を通過するには仕事を要しないが、他の道に移るには仕事が要ると云ふ様な空間の存在を教へて居る。故に太陽上の観測者が其の引力の爲に地球の公轉を起すと考へる代りに、地球上の観測者は、太陽の存在の爲に空間が彎曲して地球は知らぬ間に其の道を通つて居るとも解し得るのである。航海者は海洋の彎曲を知らない。然も何時の間にか其の航路は彎曲して居る。同様に吾人が考へて居る所の平面なるものは

其の實非常に大きな半径を有する曲面の一部と見做す事も、其所に何等の矛盾を來さない限り一向差支がないのである。それは吾人が地球面の一部である所の靜水面を以て平面と見做して居る事から考へても明瞭な事である。

空間の彎曲と云ふ觀念は、アインスタインが萬有引力問題を解決するために導入したものである。等価原理を適用すれば、一局部に於ける重力の作用を観測者の有する加速度と云ふ觀念で置き換へ得る事は已に述べた通りである。然るに此の原理のみの下に於ては、少しく離れた場所に於ける重力の方向は、観測者を横切る水平面に直角とならなくなつて、一般には當て倣らないと云ふ結果を告ぐるのである。是に反して空間の彎曲と云ふ事を考へれば、観測者は次ぎ次ぎに其の位置を變化するに當り、何時も観測者を横切る水平面は重力の方向と直角になつて、力の觀念を全く除外し得る様になるのである。故にアインスタインは、物質があれば萬有引力が起ると云ふ代りに、物質があれば其の附近の空間は彎曲すると云つて居る。而して此の彎曲空間の觀念に基づき、ガウス座標を用ひて四次元世界の幾何學的性質を論究し、新萬有引力則を完成したのである。

彎曲空間の觀念は、アインスタインに始つたものではない。己にロバチウスキーリ及びボリアイは此の觀念の下に、所謂非ユークリッド幾何學を建設して居るのである。アインスタインは此の觀念を擴張する事に由つて、一種の宇宙觀に到達した。空間は其の彎曲の爲めに閉鎖されて無終有限の擬球的宇宙を構成すと云ふのである。吾人が彎曲空間の觀念を是認するに於て、其の論理的歸結たる此の宇宙觀も亦當然是れを肯定せざるを得ない譯である。

結論 以上の解説を大觀すれば、相對性原理の内容は、左記項目の内容的研究であると云ふ事が略洞察し得られる事と信する。

(1) 自然界は運動の世界である。其處に絶対静止を意味する何物も存在しない。

(2) 運動の世界は、三次元の空間と一次元の時間との融合した四次元の世界である。

(3) 四次元の世界は、物質の存在に由つて彎曲するものである。

(4) 彎曲した四次元世界に於ては、自然現象は、其の世界に於ける諸形象の幾何學的關係として解釋し得るものである。

(5)

自然現象の法則は又力學的にも敍述し得られる。而して是等の自然法則は如何なる觀測者に由つても常に同一形式で表現せらるゝものである。

故に彎曲した四次元世界に於ける諸形象の幾何學的性質と、自然科學に於ける力學的自然法則とは對立の關係をなすものである。

是に由て觀れば、相對性原理は畢竟數學的自然觀と力學的自然觀との對立の可能を論ずるものであると云ふ事が出来る。

相對性原理に於ける力學的自然觀は、從來の自然科學に於けるものに比して頗る卓逸せる點があるけれども、等しく力學的であると云ふ意味に於て、格別珍とするに足らない。獨數學的自然觀に於ては實に古今獨歩の創意であり、空前の偉業である。吾人は是と比肩すべき何者をも見出し得ないのである。

故に相對性原理の特色と偉大と、眞髓とは、一に其の數學的自然觀の確立の上に存するものと云ふべきである。

#### 第四章 相對性原理の認識論的意義

自然の現象は、常に其れが何時、何處で、如何様に起つたかを研究される。其の上で始めて此の現象の法則が見出されるのである。而して此の際、如何様に起つたかと云ふ事が、自然現象の内容であるとするならば、何時と何處と云ふ様な時と場所、即ち一般に時間と空間とは、現象的內容の存否に拘らず

其の以前から存在して居つたものであらうか。此の問題は古くから度々哲學的思索の中に取入れられて居つたのである。

是に對して素朴的な實在論者は、自然の現象は單に外界に存在し、從つて之を容るゝ空間や時間も、最初から其處に與へられたものとして少しも疑ふ所が無かつた。近世に至りカントの批判哲學が現はるゝに及んで其の考へ方は餘程變つて來た。即ち自然の現象は、縱令其れが外界に行はれて居るものであるとしても、皆吾人の認識を通じて始めて吾人の思惟の中に持ち來されたものである。若し吾人の認識がなかつたとしたならば、自然現象の存否などは始めから問題にならなかつた筈であると云つて居る。斯うした考へ方は前者に較べて思索の形式の上に長足の進歩を認め得るけれども、然も時間空間の觀念が、先驗的に吾人の主觀の中に存するものであるとして居る點に於て、單に云ひ廻しの相違の外、内容的に格別發達の跡を見受けられない。

斯くの如き沈滯的な思想界に對して、相對性原理が巻き起した渦巻の力は、餘りに猛烈に、餘りに唐突的であった。彼は從來の哲學者や科學者たちが進んだ道をば全然逆行したのである。夫等の學者たちが時間や空間を絶對なものとして、是れを自然法則に適用した代りに、或種の自然法則を絶對の立場に置いて、是れから時間空間の新觀念を導き出したのである。茲に於てか先驗的であるとして祭り上げられたが、相對性原理は更に空間の性質及び是と時間との關係が、必ずしも先驗的なものでない事を教へた。

併しながら相對性原理は、時間空間の觀念の中に、超經驗的な、先驗的な要素の存在する事を、全然否定するものではない。其の經驗的智識によりて變革し得べき範圍を擴張し、同時に其の限界を明白にしたまである。空間の擴りや時間の長さを測定するには、從來とても自然現象の法則を利用して居つたが、相對性原理は更に空間の性質及び是と時間との關係が、必ずしも先驗的なものでない事を教へた。

のである。換言すれば吾人の経験を基礎として空間の性質や是と時間との關係を決定して置いて、其から論理の發展を試みても何等矛盾の無い論理系統を作る事が出来ると言ふのである。物質の存在に由つて空間が曲ると言つた事や、光速度が不變となる様に時間空間を決定すると言つた様な事が即ち其である。

時間空間の新觀念が、自然科學の上に及す影響の偉大なる事は全く豫想の範圍外にある。經驗的科學としての自然科學の獨自的な立場は、是が爲めに全然沒却されて、自然科學は遂に形式科學としての數學の膝下に跪くの止むなきに立ち至つたのである。

相對性原理の下に於ては、時間と空間とは獨立して居らない。即ち光速度不變の原理に由つて拘束されて居るのである。ミンコウスキイは更に此の拘束された時間と空間とを、四次元世界の幾何學として織り込んで、一層其の融合の端を高めた。然るにアインスタインは、其の四次元の世界が物質の存在に由つて彎曲するものとし、其の幾何學の中にどうして物質までも織り込んでしまつたのである。茲に於てか時間と空間と物質とは、彎曲した四次元世界の幾何學に由つて全然結び付けられてしまつた。

四次元世界が物質の存在に由つて彎曲するならば、物質上の變化即ち自然現象の發生に對して、四次元世界は又其の幾何學的性質を變へねばならぬ筈である。従つて自然現象の性質と、四次元世界の幾何學的性質とは對應すべき譯である。吾人が先に光線の彎曲に對して、是を重力の爲に曲ると解したのは即ち自然現象の性質を表すものであつて、觀測者が加速度を有するから光線が曲つたと判斷されると言つたのは四次元世界の幾何學的性質として考へたものである。球を外面から見れば凸であり、内面から見れば凹である。力学的解釋と幾何學的解釋との關係は全く是と等しい。物體を外部に載せたと云ふ事は球の内面から見れば球が内側に出張つたと云ふ事である。兩者の判断の正否は全然同格である。

吾人は從來自然法則を以て、經驗的に得られたものなる事を信じて居つた。然るに相對性原理は此の

信念を裏切つて、夫等は己に彎曲した四次元世界の幾何學の中に存在して居るものである事を教へて居る。彎曲した四次元世界の幾何學的性質と自然法則との對立と云ふ事が即ち其である。故に自然の法則は敢て直接經驗に據らないでも、其の幾何學の上から推理して、自然法則と同格のものを得、是を力学的に意味付ける事に由つて、自然法則其のものを得られると言ふ事になる。斯うした結果は經驗的科學としての自然科學の立場の消失で無くて何であらう。獨自的な立場を持つた自然科學の滅亡でなくて何であらう。果然相對性原理は、自然科學が數學の爲に征服された一編の哀史となつしてまつたのである。

總ての科學を通じて、數學は最も正確なものと思はれて居る是數學が如何様に考へた所で全く他の異つた論理の存在を許さないからである。正確と言ふ事の意義は、是れを惜いて他に求むる事は出來ない其處に數學の絶対性があり、其處に數學の普遍性が見出されるのである。然るに相對性原理は彎曲した四次元世界の幾何學的性質と自然法則との對立を結果して居る。故に此の對立が確認されたときに、幾何學の絶対普遍性に追隨して、自然法則も亦絶対普遍性を認めらるゝ事となるのである。

純粹な經驗的基礎から出發した相對性原理が、超感覺的な或種の數學の世界を事實として承認すべく強要する様になつた事は、一面に於て其處に大いなる暗示を與へらるものゝ様にも考へられる。宗教や哲學が假令其が消極的な結果に終つたとは云へ、物質以外の或物の存在を肯定せんとして居る事に較べて、相對性原理の歸結は餘りによく類似した傾向に進んで居るのである。依つて特に此の一點をも指摘して置く。

終りに臨んで一言ニウトン力学との關係に就いて言及する。相對性原理はニウトン力学の基礎とした絶対空間の存在を否定して起つたものである。故に相對性原理が確立されたときに、ニウトン力学の歸趨の如何を考へる事は、吾人に取つて當面の問題であらねばならない。而して此の際若しもニウトン力

學の廢棄を考へるものがあるならば、吾人は其の甚だ早計たるを叫ばざるを得ない。何となればニウト  
ン力學は相對性原理に比して簡明直截的に自然現象を處理し得る特色を持つて居る。又其の論理的構成  
の上に何等の缺陷をも有せず且つ極めて常識的である。加之日常普通の現象に對して相對性原理の適用  
を必要とする期會は殆んど絶無である。斯うした事情を考へたときに、ニウトン力學は將來尙自然科學  
界の一角に於て、立派に霸を稱へ得るのである。併しながら單に是れのみの理由を以て相對性原理を無  
用視する俗論に與みする譯にもいかないのである。學問の目的は眞理の探究にある。實用價值のみを以  
て其の絶對價値は決定されない。大にしては宇宙を睥睨し、小にしては電子の影に潜む相對性原理の眞  
理は、アルベルト、ains-tainの名と共に、永へに赫々たる光輝を放つであらう。

**脱稿餘錄** 出來得る限り複雑な數理的説明を省かうとして、極端な類推法を用ひた結果、至る所に  
意味の不徹底な所や誤解を招き易い部分が出來た様である。冀くば細節に泥まず、直ちに其の大綱  
を把握せん事に留意を望む。

## 潛水艦の話

特別會員　若林源藏

**緒言** 過般の歐洲大戰におきまして潛水艦の活動は素晴らしいもので、彼の獨逸小潛水艦ウ九號が英の  
巡洋艦三隻を一氣に屠り去りました如き、獨の一艦が單獨三千三百海浬の長浪を蹴破して、マルモラ海  
に侵入し、トルコの軍艦二隻を擊沈しました如き、いづれも世人を聳動せしめまして、爾來世人の注目  
は潛水艦に集中して來ました。それで艦の一般に就いて承知していたゞくのも徒事でないと信じて筆を

取りました。因みに潛水艇は潛水艦と改稱になりましたから之を承知を願ひます。

**艦の起源** 今より二百年程前、英帝ジエームス一世の時代に、和蘭人によつて發明せられた舟で、初  
めてテームス河で試みられたとの事ですが、詳かでありません。其の後百年程たちまして、ヘイと云ふ  
人が自分の發明した舟で水中に降下しました。千八百年には米人ロバートフルトンが壓縮空氣を用ひま  
して、海底二十五呎の所に數時間停つたと記録されています。然し實際の戰爭に使用されましたのは千  
八百六十三年の南北戰爭の時でありましたが、此の時用ひられた舟は甚だ幼稚なものでありまして、舟  
の中から櫂を出して人力で動かしてゐました。それが改良に改良を加へられ、進歩して今日見るが如き  
完備したものとなつたのであります。

**艦の形狀及構成** 潛水艦の魚の形をしてゐる事は、誰も御承知の事と思ひます。此の形をしてゐるの  
には二つの理由があります。一は艦は水中を潜航するものでありますが、諸君も經驗せらるゝ通り、夥  
しき抵抗が表れるものでありますから、それを減する爲にあの形をしているのであります。二  
には水中にある艦は、それより水面までの高さの大量の水を脊負つてゐる譯ですから、非常な壓力を蒙  
りますて、十米降ることに一氣壓、即ち一平方寸に二貫五百目の壓力が加はり、深度に比例してその壓  
力が増加してきますから、此の壓力に比較的堪へ易いあの形をしてゐるのです。材料の弱いもので造ら  
れてあるならば、押し潰されてしまひますが、現今は材料も強固な物が出來ますし、製艦術も進歩して  
來ましたから海中深く没する事が出來ます。魚が自然にあの形をしてゐると云ふ事は造物主もよく考へ  
たものです。

普通的艦は長さが面呎程あります。艦上四十呎ほど甲板が出來てゐまして、水上にある場合登る事が出  
来る様になつてゐます。艦の中間に指令塔がありまして、すぐその傍に潜望鏡が付いてゐます。指令塔  
にはハッチがありまして艦員は其所から出入します。

## 論 説

四〇

**艦の原動機** 潜水艦は水上を航行する場合と水中を潜航する場合と異つた原動機を使用します。水上航行の場合は、内燃式機関を便用します。以前はガソリン機関を採用してゐましたが、不安定で揮發點火して爆発し易い恐がありましたので、現今では安定なる重油を燃焼せしめるデーゼル機関を使用します。此等は不斷燃焼に多量の空氣を要し、排泄瓦斯が出來ますので、潜航の場合使用する時は水面に泡が出て艦の所在を看破せらるゝ缺點がありますから、水中には駄目です。それで潜航の場合には電動機によつて推進器を回轉せらるゝのであります。その電動機の電氣を供給するものは二次電池であります。又その離電は水上にある時に、内燃式機関によつて發動機を動かし、之に充電します。然し艦の様に場所を非常に節約せらるゝ所に二種の運轉裝置をおくと云ふ事は不便な事でもあり、又不經濟な事でもありますから、此等のものに換へる原動機を發明せんと、各國研究中であります。我國も内燃式デーゼル機関を改良して水中にも使用せんと研究してゐます。

**艦の動作** 潜水艦が潜水せんとする時には、ハッチを閉ぢ水の艦に一滴も浸入しない様にし、内燃式機關を停止して、電動機の運轉を開始し、それと同時に吸入ポンプを回轉して、後部のタンクに海水を注入し、艦の浮力を小にして横舵を取り、水中に没するのであります。この動作は非常に敏捷に行はれ又訓練せられます。此の間僅に數分を要するのみであります。現今では三分程に短縮せらるんとする勢であります。此の間は戦争の場合は非常に貴重なものであります。何となれば此の間は敵の砲火の前に曝されてゐるのでありますから、數秒の遅延は艦をして悲運に陥らしめる場合が多々あるからであります。一寸断つて置きますが、潜降に要する時間が數分間と申しましたのは、艦が漂泊又は微速にて水面を航行してゐる場合か、或は豫め潜水を豫期してをつた場合で、航行中突然潜降しまするには、少くとも十分間の餘裕は必要であります。

**艦の武器** 潜水艦の第一の攻撃武器は魚形水雷であります。現今的新式の航洋潜水艦にあります

は發射管八門より十門、魚雷の數は十數個から二十個に達しまして、發射管の口徑も十八吋もありますかくの如く、多數の發射管を持つてゐる事は、驅逐艦のそれの如く、射管を旋回して、任意の方向に雷撃する事が出來ないからであります。然し旋回發射管は近き將來に於て、潜水艦にも應用せらるゝものと信せられます。次は速射砲であります。近年その効用を發揮する様になりました。新式のには六吋速射砲と四、七吋砲を有してゐます。主として飛行機射擊用であります。其の他商船を擊沈するには特に水雷を用ひないで之を利用してゐます。

**潜望鏡** 潜水艦が水中にありまして、水上の事物を監視する唯一の視力を掌るもので、之を破壊されたらば、人が盲目となつたと同然であります。それが艦の一一番大切なものとされてゐます。望遠鏡の一種であります。長さが二十呎に達するのも稀でありません。先端に三角鏡を据ゑて物影を導き、其の下に二枚のレンズを重ね上はオブジェクトブイ下はコンデンサーであります。物象を擴大する爲に、管底に三角反射鏡及び望遠レンズがあり、長さを隨意に伸縮調節する事が出来る様になつてゐます。時に怒濤を被りながら駆進する時は飛沫の爲鏡に曇を生じます。それで絶対鏡面にアルコールを塗つて泡沫も共に蒸發さす法を取つてゐます。先端は三角稜をなしてゐまして一方のみより光線は入つて来ませんが、旋回する事によつて水中にあつて四方の景色をまのあたり見る事が出来ます。水上に出てゐる部分は僅かですが、それを専門としてゐる見張人は、遠方から發見する所の鋭い視覺を持つてゐます。それで艇長は不斷之に注視してゐます。

**羅針盤** 航路の指計となり、航海者の杖と頼む羅針盤は、新造船にありますては、必ず二種を裝置してゐまして、一は水上航行に使用し、他は水中潜航に使用します。前者は一般の艦船に使用してゐるのと同一で磁力を應用したもので、船の動搖に對して常に水平を保つ様に工夫してあります。磁石は附近に鉄片がありますと、狂を生じて來ます。殊に軍艦の様に鐵で作られてゐる中にある磁石は狂を生じます。

## 論 説

四二

して正確な方向を指しませんから兩側に大きな鐵球を居きまして、影響が相平均して殺される様になつてゐます。後者はスペリー式水中コンバースと申しまして、獨樂の應用から來てゐます。その原理は獨樂の心棒又は軸が最初に與へられた方向をかへず、常に同一方向に向つて自轉するの事實を應用したものであります。水中で水上に用ふる磁石を使用する事が出来ない理由は、潜航の場合は電動機を動かしてゐますから、電流は艦内を縦横に通つてゐます。それで電流の作用を受けて磁石はふれを生じて來ます。そしてその電流の變壓は時々刻々に變化して來まして、磁石のふれが一定して來ませんからであります。

**聽信機** 聽信機は艦が水中にありまして、敵又は味方の艦船の接近を知覺する唯一の耳であります。その聽覺は鋭敏なもので、艦内が靜肅な時には、優に一萬六千碼の遠距離にある推進器の音響を聞き取り得る能力をもつてゐます。又艦が航月中でも四千乃至五千ヤードの聽力をもつてゐます。これらは諸君が日常經驗せらるゝ如く水が音をよく傳導するからであります。

**通信装置** 潜水艦は水上にありましても視界が狭く、天候のためにしばゞ視力をさへざられますし、加ふるに航海方航續力修繕力が乏しくありますから、絶へず母艦との接觸が必要でありますから、通信は重要な部分をなしてゐます。水上信號と水中信號とあります。前者は無線電信、探照燈、形象信號、旗信號等であります。無線電信柱は潜航の場合は倒れる様になつてゐます。後者はベル信號及水中通信機であります。フェンセンデン式通信機は水中を通じて長距離へ音波を送り得る機械であります。最近は此の機によりまして百數十哩の遠距離との通信が可能であります。

**安定裝置** 先年第六潜水艦が阿多田の島の沖にて練習中、故障を生じて艇長佐久間大尉以下十四名艦員共雄々しき最期を遂げられた事は、今尙諸君の記憶に新なる事と思ひますが、現今の潜水艦はその當時とは長足の進歩もし、又左様な萬一の場合の安全裝置として、種々の手段が講せられてあります。先づ

事變の通信裝置として、電話付浮標と申しまして沈没しました場合、該浮標は艦から離れて水面に浮び水上又は陸上の味方との通信を行ふ事が出来る様になつてゐます。又艦底に鉛塊が付けてあります。その故障が起つて浮び出る事が出來ない場合に、それを切斷して艦を軽くして浮かばすのであります。その他避難法としましては司令塔離隔法と申しまして、司令塔と主甲板とを切離して浮揚する裝備、或は避難室と云て浮力のある衣服と、ヘルメットと水中呼吸器とよりなる避難服装をして避難室より交る交る遁れるのであります。

**潛水艦の任務** 潜水艦の任務は種々あらまして、その任務によつて種類が異つてゐまして、所謂分業的になつてゐます。大體沿岸用潜水艦、機雷沈置潜水艦、航洋潜水艦の三種に分たれます。沿岸用潜水艦は中型以下でありまして、主として古いをの以て是に充てます。主として自國の沿岸、港灣を中心として近海に活動して防禦の任にあたります。機械沈置潜水艦は、其の名の如く機械水雷を敵艦の通過する前面の海中に敵前を横ぎつて無数の機雷を散布するのであります。機雷を艦底に落す裝置に二つの型式があります。自動鎖落式、落下管式これであります。前者は七十五個の機雷が珠數の様に連結せられ、鎖は廻轉する裝置を有してゐまして、艦尾から一個づゝ落ちる様になつてゐます。後者は機雷の發射管が艦底に開いておりその中には十二個の機雷が入つてをりまして、其所より一個づゝ落す様に出來てゐます。航洋潜水艦は大型のもので、噸數も千噸以上からあり、(潛水艦には水中排水量と水上排水量とあります)、此の場合は水上排水量です)速力も可なりあり、航續力が大で、母艦を離れ單獨に海洋に出て活動するものであります。近年は此の種の艦が増加して來ました。

**艦員の呼吸作用** 艦は水中を潜るのが常態であります。一度水中に没しましたならば、空氣の外界よりの供給がありません。加ふに限られた空氣は、絶わず艦員の呼吸により酸素を消費せられ、炭酸瓦斯が増加し其の他機關の運轉及食品の料理によりまして、瓦斯が發生して來ます。それで此の汚染した

## 論 説

空氣を洗滌する爲に、種々の手段が講せられてゐます。即ち壓搾空氣を貯藏し、或は酸化ボタシュムを必要に應じて水に溶解し、酸素を發生せしめ、或は又苛性曹達を以て炭酸瓦斯を吸收せしめゐます。一體人間の酸素呼吸量は、活動と靜止と晝間と夜間とによりまして大なる差があります。活動してゐる人は一時間に約八十五立の空氣を呼吸するに反し、眠つてゐる人は僅に十五立しか消費しません。此處の世界は空氣に金がかゝつてゐるのでありますから、艦員としましては非當番の時には機關の騒音にも妨げられず、熟睡する事を希望せられます。若し敵に發見せられまして海中に長らく停る事を餘儀なくせられた場合に、直に空氣の量が問題になつて來ます。現今潜在時間の限度は、英國は數次の経験の結果、三十四時間を以て極限であると云つてゐますが、何事にも誇大な數字を豫言する米國は三晝夜の潜在は不可能でないと豪語してゐます。

**潜水艦に對する防禦**　海を壓して浮ぶ艦船も一度蟻の様な潜水艦の襲撃に會へば、手を空うして致命傷を受けなければならぬ様な有様でありますから、近年潜水艦に對する防禦法が喧しく論議せらるゝ様になりました。積極的の防禦法としましては發見するや直ちに逆襲して砲火を浴せると共に、身を以て轟進して衝撃を加へ、艦を觸撃粉碎するのであります。之は甚だ暴虎馴河の類の様に見りますが、いたつて有効であります。消極的の防禦法としましては、危險區域に入りましたならば、航路を千鳥形に取りて、敵に進路を知らしめない様にし、高速力で航行し、夜間は消燈して所在を知らしめず、驅逐艦飛行機をして或は前後左右を護衛せしめ、或は敵を搜索せしめるのであります。一體潜水艦の苦手とするものは驅逐艦と飛行機であります。飛行機の視力は海中に鋭くあります。海水が透明な場合は、彼の女の所在を發見するのに甚だ敏くあります。驅逐艦は艦形小さく、船脚が淺く、速力が早いから、衝撃法を用ひしめるのには甚だ便利であります。間接の防禦法としましては、水雷防禦網を展張します。然しけ頃の魚雷は先端に網切器を付けてゐるそうですから、防禦を申しますよりも、緩和と云つた程度でせ

う。次は軍艦の水線附近を厚き網鐵板で施す事であります。四時の装甲板は魚雷を防禦する事が出來る事ですが、然しそれが爲に軍艦の重要な要素をしめてゐる速力に影響してきますから、矢鱈に厚くする事も出來ません。其の外、根據地或は港灣の入口に網を張つて、艦を入れしめない様にしたり、危險區域の搜海をやつたりします。

**我が國の潜水艦**　列強に比べまして、我が國の潜水艦は其の數におきましても裝備に於きましても數歩後れてゐます。現今二三十隻はありませうが、其の半數は舊式に屬するものであります。原因は奈邊にあるかと申しますと衰頼しておつた主力艦の補充に日も惟れ足らん有様で、潜水艦の擴張に餘裕がなかつた事と、研究費が不足で制度が不備で、製艦術があまり進歩しなかつたからであります。近頃當局者も目覺める所がありまして、狼狽の態で建造をいそいでゐます。出發に際して數歩後れました、日本、假令平等に出發しましても、競爭場裡に後れる日本が、列強に追従する事が出来るか、甚だ寒心に堪へない次第であります。然し今度のワシントン會議に於きまして、主力艦は制限せられ、その方面の餘裕が出來ましたから、未だ話が纏らなかつた潜水艦の方面に、我國も全力を注ぐ事が出来ますのは、結構な事であります。今は艦數は伊國に匹敵して來ましたが、護らねばならぬ海岸線は此の國よりも遙に大でありますから、倍數ありましても決して多過ぎる事はありません。

**艦の價値**　歐洲大戰に於きまして、獨逸は英國の海軍力が自國のそれの二倍半で、到底正面より對抗するの不可能である事を知り、急に多數の潜水艦を建造し、英佛海峽英國の沿岸に派遣し、商船百五十餘隻を擊沈し、英國の海軍をして少なからずその活動を阻止しました。爾來スコット將軍を初どし、各國に潜水艦万能論潜水艦單一國防論を稱へる者が輩出する様になりました。彼等は申します、「決戦に關する潜水艦の能力は恃むに足りませんが、元々國防とは國を守るのであります。敵を攻めるのではありませんが、潛水艦を以て護國の大任を容易に果す事が出来る何を苦しんでか巨額の金を投じて大艦を建造

する必要がありませうか」と、一見もつこもの議論の様ですが、熟考してみまするに、經濟の點に於きまして、人々が想像する程懸隔のあるものではありません。三萬噸の戰艦の代に何隻の潜水艦が造る事が出来るかと申しますと、前者を貳千七百萬圓としまして、後者は約貳百五拾萬圓に當りますから、約一對十の比になりますけれども、艦の生命は前者が十年に比較しまして、後者は五年でありますから、軍艦一隻に對して潜水艦五隻と經濟上同等の價値になります。八四艦隊即十二隻のド級艦は、それに僅の附屬艦を付けますと、征戰の場裡に相當活動する事が出來ますが、百餘隻の潜水艦は海岸線の長い我が國の國防必要額に對して大海の一滴にも及びません然らば果して經濟の點に於て得策なりと云ひ得ようか。次に戰端が開かれた場合に、潜水艦のみを以て國防を容易に完くし得ませうか。之を吟味してみませう。先づ潜水艦が守勢の側に出で、一意沿岸の防備に從事したとします。至る所缺陷が生ずる事は明かであります。よし完全に出來たとしましても相手の敵國は大艦の出動は不利である事を覺り、航空隊驅逐艦モーターボート等を送ります。潜水艦は損害のみ多く、敵を損傷する事が少しも出來ず止むを得ず港灣に引上げます。此に於て制海權は最早や敵國に奪はれたと同様であります。次に潜水艦が攻勢的に出たならば、どうかと申しまするに、敵よりも早く敵國に侵入すること云ふ事は甚だ困難で、到底望まれません。結局守勢の形になります。又海洋に會戦しました場合に於きましても、敵は驅逐艦飛行機、飛行船等を先頭に立たせて捜索爆弾投下衝撃等を用ひさせまして、大艦は後方に控へ、砲擊を開始しますから、潜水艦は殲滅をまぬがれません。是に由つて之を觀れば國防を完くする事が出來ない事は火を見るより明かであります。此何故かと申しますと、元來潜水艦は奇襲と威嚇が特徴であります。然らば艦の真價は何所にありますか、元々艦は魚雷を使用せん爲に生れ出了のでありますから、戰艦を擊たん爲の潜水艦であります。戰艦があつて初めて初めて潜水艦が重要な戰闘單位として價値があるのです。

## 繼續性について

特別會員  
佐 竹 貞

繼續性の物質に於けるものを説明するのではなく、人間の心理現象としてに就いて述べて見たい。

依慾、擴展慾、今茲に説べんとする保持繼續慾等それである。即繼續的欲求は、人間欲求性の一である。一體欲求性は心的生活の一面に相違ない。即ち人は知り、覺へ、考へ、又は感動し欲求する。此欲求は無自覺的と自覺的になつて活動する。その無自覺的活動は衝動、本能の如きものを言ふのである。衝動を分析すると、欲求の芽は茲に根ざしてゐる。

營養衝動  
休安衝動  
知的衝動  
情的衝動  
道德的衝動  
美的衝動

受應興奮活動  
發進興奮活動

宗教的衝動等皆同じに無自覺的根本性がある。

本能は、心理學者は色々に意見を立てゝ説明するが、余は衝動の發達したものゝ一として説明するが至當と考へてゐる。即ち活動の目的を明確に自覺して活動するのではなく、其活動が恰も發達した知見により示されたる目的を追求するが如きの活動をするのを指す。尤もこれは天稟的自發的のもので、個人の習慣的無自覺的活動とは別であるのは言ふまでもない事だ。

人の心的活動は大別すると

發進興奮活動とになる。即ち

消極的興奮と

積極的興奮との二態になる。例へば身體の缺乏を唯満したり、外物の刺戟に唯興奮應起したりする單

純な心活動が前者で、選んで身體の缺乏を充し、選んで物心を對象として活動する心活動は後者である。即ちカロリーを考へて食物を調理したり、科學的知識を求めたり、道徳的探究をしたり、美的妙趣を味ふたり、宗教的玄義を悟得したりするが如きは其一例である。此積極的心理現象は人の保持繼續欲に密接なる關係をもつてゐる。

繼續性の欲求も幼稚なものは、其空間的時間的性質共に微少で受應消極的の態にあるけれども、心生活が發達するにつけて夥しく且つ猛烈に表現勃動するのである。著しいものに例を取ると

大金を貯め込もうとする

權勢を張らうとする

名譽を博せんとする

長命を強いて望む

高徳を欲する

美的生活を熱愛する

哲學科學宗教的究明を計る

此等は何れを見ても大したものばかりで、やりかけて見ると容易に果のあるものでない。これではやりきれない。そこで又考へ直すのである。がしかし考へ直さない人も勿論居るのである。

問題は乃ち保持繼續欲求を一番満足せしむるのは何かと言ふのである。巨萬の富、一團一世一國の權勢、五十七百年の肉體的生命、此等はあまりに此問題には役に立たないものだと氣がつく。しか」名譽、高徳、美的生活、將に究學、信仰となると、其解釋の仕方即ち意味の附け方即内包の如何に依つて隨分有力な性質を表示するので、一寸甲乙眞偽が分らないのである。けれども繼續性の欲求を眞に満足させようとする人は、人として最も價値ある自覺生活を欲するから、此疑問を捨てやりにはして置け

## 論 説

五〇

ないで一々調べるのである。此際自暴自棄になつたり、懷疑に陥つたり、研究の無價値を信じたりする。此等何れも明智を掩ふ惡魔の術に博たれたのである。何！物は敲てば開かる。先づ吾人を迷はしむる欲求に出来るだけ内包を詰め込んで出来るだけ大きく、深く、長く考へて見る。然するごとに一理を見出す。曰くそれ自身の名の名として居る自明の意味では、何の味もなく効用もない漠とした事だ。少しの満足も與へない世人の用ゐてゐる言語文字は詰らないものだと言ふ感さへする。

こゝに於て愈自ら考へて、せめて自己だけなりとも此根本義を知得したいと言ふ氣になる。

眞の名譽とは何ぞ。

眞の高徳とは何ぞ。

眞の知的生活とは何ぞ。

眞の美的生活とは何ぞ。

眞の信仰とは何ぞ。

此眞のがむつかしい。科學的哲學的に探究する要がある。然り而して此研究は根本的で至要で至難である。古來學者も甚だ困難した。考へに考へ、探るに探り、索むるに索め、調べ漸くにして得た一點の光明を、やれ言語文字文章に言ひ表はさうとする、どうも間違つたものになつてしまふ。思ひかへすとあまりに内包か外延が大きく、多く、深く、遠く、近く、淺く、少く小さいので頭が暗んてしまふ。他人には言へないが自分にはボツと分る。分ると言ふよりは體する。

こゝが此境界が一番根本になつて居る保持繼續性の在所で、絶對地である。眞のと言はるゝ意味は皆こゝから縁(意味)を得て居るのである。實に尊い。永遠である。

しかし又考へると保持繼續性だの、大だの、深だの、強だの、永遠だの、絶對だのと言ふことが寂滅

する。そして實はある。絶對になる。變なものになる。

究めなくてもよかつたのであるとも思へる。が然うでもない。究めてよかつたのである。即ち人間は心の性につらされて斯う言ふことをするのである。即こゝが絶對である。永劫を含み、剎那を含む

(大正二・九・六稿)

## 現實に即して

四 甲 角 田 清 八 郎

眞の雄辯は眞の沈黙である。昔釋尊が靈山の會上に在つて、蓮華を枯して衆に示した。其時衆皆寂然惟だ迦葉尊者獨り破顔微笑、語默の中に眞理を傳達したといふ事である。即ち以心契心の妙處である。是時釋尊は云ふべき何者をも持たず、迦葉も何ども返答する事が出來なかつたのだ。是境こそ眞の雄辯の國土であり、而かも眞の沈黙の領土である。今私が喋々こして辯じましても所謂多辯にして雄辯たる事を得ないのである。此の限られたる語言を以ては決して眞理は傳へ得べきものではない、話す余の如きは勿論眞理を體驗した事もなく誠に慚愧の至である。

然れども吾人人生の目的は眞理の實現に在るのである。即ち現實に即して現實以上に達觀せんとの努力である。古來幾多の聖人偉人皆之を實現せんとしたのだ。社會發達の目的も之に外ならないのだ。眞に現實以上に達觀した人こそ眞の人間生活であり、尊く、樂しく、信あり、常ありこそ眞の絶對だ。

西洋のワットが鐵瓶の湯の立つを見て大機關車を發明したのも、かのニュードンが林檎の地上に落つて見て偉大なる引力を發見したのも、皆現實を離れず現實を通じて、現實以上に達觀したのではない

## 論 説

五二

か。翻つて眼を東洋に轉じて見ても事實は異なれりと雖も、彼の孔門十哲の第一人顔回は亂世に當り陋居にあり、一簞の食一瓢の飲人は其の憂に堪へざるに顏子は獨り其の樂を改めずと論語に記せるも、彼が現實以上に達觀したる所あればこそ此の悠々自若たる所があつたのではないか。又彼の釋尊は身九重の尊きにありながら、戀しき妻子を捨てて山林に入り難行苦行をしたのも現實以上に達觀せんとの努力に外ならないのではないか。終に彼は涅槃の境に入り、小我を捨て、大我に歸せよ。差別中に平等性を見よと説いて居るではないか。キリストに於ても亦然りである。只一片の野花にも天父の慈悲を感じたのも皆現實に即して現實以上に達觀したのである。

詩人も亦現實以上に達觀せんとして居るのである。路傍に落ちたる只一箇の小石と雖も、古來幾多の英雄、美人、偉人、奇人、狂人否な牛、馬をも透して、而かも心大に寛に永劫に沈黙の歌を口すさみ微笑を漏らして居るといふやうな所には心行くばかり奥床しい聖者の面影をさへ偲はしむる者があるのである。詩人も宗教家も皆同じだ。詩禪一味だ。

有限なる畫筆を以て無限のインスピレイシヨンを發揮し、有限なる音譜を以て無限縹渺たる靈感を興へるのが、彼等畫家音樂家の生命である。

此の中にあらゆる道徳も皆解決がつくのだ。此に私は本能の醇化といふ事について暫く解かんとするのである。或道學先生の如きは本能を斷滅せよと説くけれども、眞の道徳は本能を醇化する事によつて得られるのだ。即心即佛だ、煩惱に即して菩提心は得られるのだ。現實に即して現實以上に達觀するのだ。

世の潮流を見れば今や世人は滔々として現實の風に流れんとして居る頭よりも帽子を大切にする生活は神經衰弱の文明である。死んだ馬を飾つて千里の路を走らせようとするのだ。冀くは諸君の現實以上に達觀せられん事を。

## スキー遊びを奨む

四乙富田忠之

運動の人生に必要なるは何人も之を認め、之を奨むる所にして改めて、喋々するを要せざる所なり。然れどもかく人生に缺くべからざる運動も其の季節は、殆んど春夏秋の三季に限られ、枯木に花の咲く頃に至れば遂に其の餘榮たになき如きが常なり。かくの如く、寒氣の爲に必要にして且つ興味深き野外の運動もなすを得ず、空しく三、四ヶ月を屋内にて暮さざるべからざるは、甚だ遺憾とする所なり。然らば冬は戸外の運動は不可能なりや？否らず。曰く雪合戦、曰くスケート、曰く雪中登山、曰く雪中行軍尙其の他にあるべし。然れども僕は、寒中の遊戯として最も勇壯にして、効多く、且つ最も興味多きものとしてスキー競技を推奨するものなり。白雪皚々として際限なきか如き平原、萬草姿を没して何物の障害もなき山岳を潤歩し跋渉する時の快を考へ見よ、如何にそが愉快にして男性的なる遊びなるか。蓋し想像するに難からざるべし。其の遊びの如何に興味深く、有効なるかを一記するは野暮の到りなれば只其の例を示し以つて諸君の判断に任せん。

伊吹山に冬來るとの記事新聞に出づれば、京都、大阪、神戸あたりよりスキーを愛する多數の人々は伊吹を指して集まり来るなり。其の中には年の暮より來り、年越を伊吹山麓の村になすものあり、土曜日より一泊にて来るあり、而して彼等の中には、五拾餘の老人あり、捨才未滿の少年あり、女さへあり此れ等の人々は一度此の遊びをなして止むる能はず友を誘ひ、子を連れて來りし者のみなり。此れをもて其の如何に愉快なるかを知るべし。又スキーをなすべく、登山する多數の者が皆二人前の辨當を持參するを忘れる點に於て如何に其の技の體育に有効なるかを知るに足らん。冬伊吹に集ひ来る者の京

阪、神の人々が其の大多數を占め居るを見て、我が彦中生は如何の感をかなす。彼等は遠路わざぐる來りしもののみなり、彦根より伊吹山までは幾許の里程かる。一日にして其の快を味ひ、其の日に歸彦するを得るに非ずや。况んや本校にスキー台のあるあり、諸君にして此れを活用せば必ず體育上多大の効益を收め得る事と信す、而して諸君の中にスキーを遊ぶ者の多數を數ふるに至らば、やがて本校にもスキー部の設立を見るに至るべし、而してそは必らず近き將來のことならん。噫かくも多くの便利を有する我が校友諸兄たるものいかでか雪中の伊吹を征服せずして可ならん。最後にスキーの絶対に危険ならざるを一言す、そは斯界の大家の屢斷言する所にして且つ、少生の淺薄なる經驗によりても證明するを得ればなり。貴重なる紙面を汚せし愚筆の多少なりとも諸君の参考となり、奮起さるゝ基ともなれば小生の幸之に過ぎず。諸兄幸ひに之を諒せよ。(終)



## 詞藻



あゝデヨン

五甲 藤田正雄

あゝ我が愛犬デヨンは死んだ。

デヨンはもうこの世にゐない。

何故かデヨンには昨日あたりから元氣が無い。

昨日は僕が歸つて來ても迎ひに來なかつた。外所から歸つて來るご尾を振つて迎へ、僕が頭をなせてやるごきつと足に巻きつくのである。それが昨日に限つて迎ひに來ないので、何だか物足らぬ感がした。母は僕を見ると直ちにデヨンは病氣だと告げられた。僕はゲートルも取らないで、デヨンの傍に行き、「デヨンぐ」と呼んだ。デヨンは苦しそうに寝て居たが、僕の呼んだ時、頭を上げて

僕の方を見た、その目には言ひしれぬ苦しみを含んでゐる。そして涙ぐんでもゐるやうに思はれる。「デヨン、どうした」。この場合僕はかう問ふより外に言葉がなかつた。彼の頭をなせてやつても、もう手をねぶる元氣が無いのだらう。知らん顔して再びねてしまつた。

今日の朝となつた。天氣是非常によい。伊吹山もはつきり見えてゐる。然し僕の心だけはかなしい。今、犬のうなつてゐるのが聞こえる。何でも母の言ふ所によれば、昨夜中うなり通したといふ事だ。それが爲に母は一睡も出来なかつたどこばしである。僕は目をさますや否や、デヨンの側に立つた。氣のせいかも知れぬが昨日にくらべてなほ一層苦しんでゐるやうに見えた。「デヨン」と呼んで見た。顔も上げないでうなるのみだ。再び呼んだ。同様である。昨日より悪いといふのは氣のせいでは無くて事實であつた。あゝデヨンは顔を上げる元氣もないものである。或はもう聞こえないのか知れない。其處へ母もやつて来て、「もう今日がむつかし

い」と曰つた。實際デヨンは死にかゝつてゐる。然し僕はわざと「大丈夫、これ位で死にはせぬ」と反対した。

「ジョンよ」僕はかう云つて家を出た。道々恐らくこれがデヨンとの永遠の別だらうと考へながら登校した。學校で授業を受けてゐても、武道の時間に稽古をしてゐても、デヨンの事が僕の頭から離れない。果してデヨンはあの儘に死んでしまふのだろうか。デヨンの命はあれだけだらうか。なごゝ色々の事を考へた。その中今朝一友人の云つた言葉——犬は中々死ぬものでは無い——を思ひ浮かべた。さうだ。犬は中々死ぬものでは無い。神よ、犬は中々死ぬものでないと定めよ。神よ、總ての犬にこの定が用ひられないならば、唯デヨンにだけ宜しい。おゝデヨン生きよ、生きよ永遠に、僕どゝもに永遠に生きやうでは無いか。こんな考が僕の腦中を走馬燈のやうに動いてゐた。一層の事授業を休んで歸らうか。いや、僕が休んで歸つたとてデヨンの命は延びはしない。それにデヨンの垂死の状態を目撃するに忍びない。目の前で愛

犬が死なんとする時、僕はどうするだらう。立つても坐つても僕の心はをさまらないだらう。それよりはデヨンの死を見ない方がましである。出来事なら僕の頭からデヨンといふ考を全然なくしてしまいたい。も一つ出来る事なら僕は病に苦しむデヨンの代りに、健全なるデヨンを家に見出したい。

「嗚呼今頃ジョンはどうしてゐるだらう。死んでしまつただらうか。或は朝と同じやうにうなづてゐるだらうか。ジョンよ、願はくば僕をして汝の苦しむ様を見せしむるな。お前の苦しんでゐるのを見てゐるのは、僕自身が苦しむよりもつらいのだから。どうしても死なねばならぬ運命ならば僕の歸宅せぬまでに死んでゐて呉れ。あゝジョンよ……」僕は歸途汽車の中で、幾度かこれを繰返したか知れない。家へ歸つた。デヨンは死んでゐた。デヨンの死顔には少しも今まで苦しんだやうな氣色は認められない。安らかにねむつてゐるやうだ。僕は強いて母からデヨンの死んだ状態を尋ねはしなかつた。

た。

デヨンを失ふた後の僕は非常にさびしくなつた。勉強につかれて庭に行くと、其處には僕の愛するデヨンが僕をまつてゐた。僕の顔を見て、彼は尾をビン／＼振る。それから僕とデヨンとは遊んだ。この間につかれた頭は何日かクリアになつてしまふ。ほんとうにデヨンは僕の疲勞恢復剤であつた。あゝけれども唯一のデヨンは死んでしまつた。

あゝもう僕は書く元氣もない。デヨンの事を書けば書く程餘計に悲しくなつてくる。

大正十一年十一月四日——即ち今日——程いやす日はない。この日こそ天は我が愛犬デヨンの命を奪つたのである。

我が悩みをOがもごに捧ぐ

五丙上野中

天地にはいつの間にか秋が廻つて來ました。我が

いた。そのとき母はデヨンに向つて、「此の次生れかはつて来るときは人間になつてこい」といつた。然し、デヨンよ、僕は人間に生れられよとはいはない、生れ變ることが出来るなら、もつと命の長い犬であれと言ひたい」僕は汝の命の長い犬となるを祈る。これが僕のデヨンとの別離の言葉だ。デヨンを埋めてしまつて家に入ると、母は「僧を頼んでお經をよんでやろ」といふ。が僕は從はなかつた。僕の愛するデヨンはお經をよんでもらはなくとも瞑し得ると信じたからである。

僕はデヨンを葬り終つて静かに机の前に坐つた。本を出して勉強する氣にもなれず、唯坐つたまゝで、瞑想に耽つた。「愛するデヨンは死んだ」どう考へてもこの事はいつはりのやうに思へてならない。何處か遠い處でワン／＼ほのいて、僕を呼んでゐるやうだ。「デヨン！」呼んでも聲はない。けれども黄茶色の小さな動物の尾を振つて立つてゐるのが見ゆる——と急に人聲がした。それは母が「何をそんなに考へてゐるか」と問ふたのだが

Oさん

廣がらぬ庭隅に培はれた一輪の朝顔も打誘ふ涼風

にいろづいて今は僅に一葉二葉敗殘の縁を止むる  
も尚生きんとするやつきさがほのみにて居りま  
す。萎び切つたこの朝顔をみつめるともなくみ  
つめるこ、人生の晩年のあはれさを想ひ、これに  
つれて種々の連想が起るのです。併しそこに何等  
の不安をも見出されなかつた。彼の結びし種子に  
よつて彼が彼の本分を盡せしことを雄辯に物語ら  
れてゐる。私は堪へ切れぬ恥羞と嚴かな感じを持  
つて、私のノートを捕へ自然の與ふる眞理に向つ  
て、小さき朝顔に向つて無限の感謝を捧げるので  
あつた。

○さん 晩夏！初秋！そこに限り無き淋しさが  
ひそめられてゐるそこにすべての清澄さがある。

清く晴れ渡つた午後は倦怠と無聊に充され、喧し  
き蜩の餘音が單調な生活に疲れた私のものうい耳  
に響いてくる。漾艶とした私の脳裡にあと方もな  
う滅んでしまつた夏の午後の樂しさは、蜩の聲に  
甘き追憶の跡を辿りて何時の間にか深い眠りに落  
ちて行く。その蜩の聲も段々と細り行きて、死の

暗影がその聲にたゞよつてゐます。

あゝ私の運命も常綠樹の影に立つ校舎と遠から  
ずして去つてしまふのか！さうして波瀾多き社會  
にあてもなく放浪の旅に上の日が！あゝ丁度蜩が  
死の寒き豫感に慄きつゝ焦燥と美聲の誇りに驅ら  
れ自暴自棄に叫ぶのと自分と云ふものと比べた  
ならば大差はなからう。

○さん あゝ黄昏が來ました。蒼然たる暮色が  
次第に野末から山麓から降つて黄昏の静けさを破  
つて般々と鐘の音が聞ゆて来る。

一、ほのかの夕暗に

電燈とばさで頬づけば  
わびしき我が胸に

詩の響もて打つ鐘の音。

二、静けさ破る鐘が音は  
長き餘音を足引きて  
野末の果てに流れ行く

い月光を受けて宛然神秘な幻影の如く屹立して居  
る。四邊は恐ろしい程閑寂して居る。

○さん あゝ静かだ。嚴肅の静けさを持つ秋の  
夜は堪へ難き迄に寂寥と悲哀を感じしむると同時  
に云ひ知れぬ詩情と神秘を與へるものだ。自分は  
たまらなき感激を感じ、歌はんと欲したけれど  
も、恵まれぬ詩才は歌はれなかつた。私は縱ひ悲  
しかつたけれども満足であつた。

私はソツと弟の寢息を覗ひ乍ら、灯を消して机  
に附つきつゝ青白く照られた窓外をみ入つた。  
さうして沈黙と寂寥とに充たされた夜はねて過ぎ  
去つた自己の悲惨な運命を考へるものだ。さうし  
て幼な心にもはつきりと刻まれた懷かしい思い出  
追想するご慰籍も享樂も無き流轉の激しい現實の  
冷たき中に見出された自己に對して、重々しい悲  
しみが轟々と身に迫るのを覺ゆる。

○さん 淋しい虫の音をジッと聞き乍らせんチ  
メンタル的な過去の思出に耽つて居ると、心が深  
い深い悲哀の中に引込まれるのだ。然しそれも或  
る時の惱みにすぎないかも知れない。

○さん 「未だよ、未だよ私の頬はかれらの呼吸を感じてゐるのに、ほんの身近に想はれる月日が過ぎ去り、永久に過ぎ去り、それなり亡び失せて、しまふなんて、そんなことが有り得ようか。」

英詩人ホーフマンスターが月日の流れの急なのを歌つた。自分は未だ若い。これからだ。これからだと思ひ乍ら蔓の様に月日が流れて青春の泉が涸れてしまふ。

○さん 過去幾萬年以來すべての人類が踏み來つた轍だ。自分と云ふものも此の苦しい轍から洩れなかつた。

二學期から改心して勉強すると思ひ乍ら遂に得る所なく學びの庭を去つて行くのだ。今更口惜しく感じられる。

○さん 君が洛陽の都より我が故里の中學へ轉校して早や數ヶ月を闇してしまつた。此の淋しい田舎の生活は君をして何等の印象をも與へなかつたであらう。紅顔の美少年として餘りに單調な生活であるかも知れない。あゝ併し君は幸福だ。何等の惱みもなく安らかな寝りより覺めて、歡樂の

果敢い流轉を續けて居るのだ。併し酷薄な抵抗に打勝つて強い悲惨な執着を征服した者が結局最後の勝利者だ。而して此の勝利者が青い黒い運命を征服して、其の結果彼等の身邊に飾るものは現實の悲惨な生の苦鬪を慰藉すべき否その報酬たるべき、成功の二字だ。

人間はそれを得ようとはするのだ。それが吾等現實に生を享けた者の最終の理想だ。而してその末路はある恐ろしい死だ。其の末路は皆同じだ。

○さん 空想的な自分はこんな妄想に耽つてゐる中に、静かな秋は更けるのだ。やはり可憐な虫はホロ／＼と歎泣いて居る。あゝさうだ。此惱み多く又一面に慰藉多き自然を征服して吾等が渴望の焦點たる永久の勝利者でありたい。だが人間は何故かくもむつかしい窮窟な掟があるんだらう！ 自然にも亦尊い愛が存在して居る。吾等はその一面暖かい自然の恩澤に浴して、その生の奮闘に疲れたる心を慰撫すべきだ。高く澄み渡る蒼空を仰ぎて心行く迄自然を謳歌したい。あゝ藝術は神聖だ絶對無上だ。

日の光を仰ぎ、限り無き生の執着を感じ大きく呼吸してゐる。君との交際に於ける自分と云ふものがどんなに君の目に寫つたゞらう。自分は實際小さな無價なものであつた。

○さん 過去の陰惨な生活は自分を惱ました。自分はその陰惨な暗影から免るべく文學に走つた。惱みのあまり生に疑ひ抱かしめ哲學に入つた。併し果て知れぬ哲理は淺薄な頭にては容易に入るを拒まれるのであつた。幾度か死と云ふものに悲惨な生活は興味を抱かした事だらう。

あゝあの悲惨な自分の運命や、それに絡まる暗黒の中の複雑な経過が、どんなに自分を感傷的にならしめただらう。あゝそれも過去だ。少くとも過去をとして葬りたい。

○さん 梧葉がバサ／＼と落つる秋それは彼等にそつてどんなに残酷なものであつたゞらう！夢の様にホロ／＼と落つる哀れな落葉が春の悲惨な落魄者を聯想させるのだ。人類は皆悲哀、貧困、苦鬪の中にじめぐした慘めな生活をしてゐる。此等の殘酷な呪咀の陰影が人生に執着して人生はらせば

○さん 可成り自分の性格に一致した藝術も、それに對する抱負も與へられないと同じだ。縱ひ藝術の方面に自己自身を見出すことは出來なかつたにしても、一生藝術の研究を捨てない。堪へ知れぬ、惱みを抱いて街邊に立つて無限の蒼空を眺め、自分の運命を開拓すべき使命の國に想ひを走らせば

お脊戸に立ちて一抹の

雲の流れを眺めつゝ

未だ知らぬ

夢想の國を思へば

心細さと孤獨が

ひた／＼襲ひ来て

故知らぬ涙が

若き瞳より流れ出づ

日走早くも日は沈む

暮にわかれの鐘は鳴る

○さん 吾等が夢想の南國に北満に心行く迄生の奮闘を續けつゝある人々はどんなに幸福だらう。

あのボーボーと巨象の惡魔の吼ゆる汽笛はどんなに血に燃ゆる若者的心を躍らすだらう。一抹の黒煙を吐きつゝ萬里の波濤を蹴破りつゝ、進み行く船は血に燃ゆる若者的心にどんなに映るだらう。その若き瞳はどんなに輝くだらう。

○さん 併し夢想の南國に憧憬の瞳を輝かす自分にはどんなに心細さと悲しみが藏される事だらう。自分は大鵬ぢやない翼を挫れた小鳥なのだ。愛する故國の敗殘者なのだ。みじめな自分と云ふものを故國にみいだすには餘りに心苦しかつた。要するに敗殘者なのだ。弱者なのだ。逃避者なのだ。

社会に容れられない自分を、夢想の南國に行つたならば、或は優しく抱いてくれるかも知れない。さうして其處に限りなき財寶がある。

○さん 大言壯語しあらゆる反抗を敢てする自分は、心にひそめる惱みの發露にすぎないので。

不平の表示にすぎないので。

○さん 此の彦根に於ける私の生活はどんなにつまらなかつた事だらう。自分の與へられた或るものを滅茶滅茶にされてしまつた。少なくともこの土地に對する私は呪咀と嫌惡に充たされ、此の土地を去つたならば、永久にこの土地を踏むまいと思ふ。

○さん 月が雲に隠れて仕舞つた。天地は靜謐と黝冥に蔽はれた。蟲が啼いて居る。

○さん 左様なら此の描き文が御身の手に開かれるそのときは、荒涼たる心を抱いて地上の何處かに私は放浪してゐるだらう。これがすべての惱みでなかつたかも知れない。もつと／＼深い苦しみと惱みが此の小さい胸にひそめられてあるけれども。

○さん 左様なら。私は永久に御身と云ふものを忘れない。だらう。

無限の悲しみの内に君がもとに捧ぐ。

一九三二、一〇、七一

## 心の嘯き

四甲 角田清八郎

○靈手を擧げて無門の關門を叩けば其處には不斷の神靈の御聲が漏れ響いてゐる。

無邊風月眼中眼  
柳暗花明千萬戸  
敲門處々有人囁

寒山の此詩が碧巖百則の風光を歌ひ、其の面目を頗してゐるといはれて居るが單に碧巖百則のみでない、一切の宇宙一切の人生、一切の生活一切の境界は此詩の中に歌ひ盡してゐる。

○我が唇が天工の美、造化の秀をなめた時の歡喜無上の恍惚境——其處に詩禪一味の融合境がある。

○神を見た人は魔羅を見た人である。

○「不識」の一境は人間精神本來の祖國である。達磨は此の「不識」を提唱して武帝の腹を寒からしめ、カント此の「不識」を唱道して全歐洲の哲學界をして行く所を迷はしめた。

白頭波上白頭翁

一尺鱸魚新釣得

萬里清江萬里天  
漁翁醉着無人喚  
過午醒來雪滿船

家逐缸移浦々風

兒孫吹火荻花中

漁村の幽趣亦掬すべし。

○ 鶴聲茅店月 人跡板橋霜 一虛字を着せず、

曉行景色都て目前にあり。此れ真に傑作なり。

○ 詩必しも窮して後工なるに非す、杜甫を目して窮するが故に工なりといふものは眞論にあらざるなり。

○ 古書幾卷 水仙と梅花が瓶に活けられてゐる。其傍に青燈が光を放つてゐる。其間に端坐して古今の詩海に棹さす、煙波漂渺の間、漁笛も聞れる孤鴈も鳴く、青山もある、遠帆もある、花もある。月もある。實に不盡の趣味がある。

○ 黄花晚節賢宰相 秋容寒瘦古詩人 清朝詩人張船山詠菊の作だ。詠物上乘といふべきである。

### 高野山參詣の記

四甲門野徳三

霜月五日 空は隅なく澄み渡り、秋の日や、傾く頃高野口に汽車を見捨て、軽装とのへ、早や

は極樂淨土に入るなり。こゝ不動坂も早や過ぐれば、名もいたいけな稚兒ヶ瀧あり。一橋を架す斜陽に燃ゆる紅の葉爛然として翁鬱たる碧紺と相對す。翠黛の山、錦紅の垣、筆も詞も及びがたし。

高野口より三里二十六町にして女人堂にいたりぬ。女人禁制の昔時は知らず、今は堂空しく古を語るのみなり。此處を下れば左に波切不動堂あり。我が宿房福地院も程遠からじ。秋の日の漸く西に入る午後四時福地院の門をくぐりぬ。休憩すること暫時。徒步に疲れし足ひきすりて珠數屋の小童の案内に途々古跡を探りつゝ奥の院に詣でぬ。山頂の町を小田原町といふ。町の中程に金剛三昧院あり。院の多寶塔は鎌倉二位の尼の建立なりと。西谷不動堂には美福門院の御陵在りと。荊萱堂は小田原町の盡くる處にあり。平家物語によれば可憐なる石童丸は維盛に從ひて登山なしたりと云ふ。事の實否は暫措き、燈下に蛇化して相争へる妻妾の頭髪の障子に映するを見て世を嘆み、様を變へし荊萱道心と父を獨り深山に索める石童丸

紀の川を渡る。渡ればやがて九度山町、豊家の杜臣真田父子が潛居の跡を訪ひぬ。

高野山の前峰たる天鉢山麓に大師の母堂隱棲の地なりし慈尊院ありとかや。されど秋の日脚の早ければとて訪はで出で行きぬ。此れより丹生川に沿ひて行く事一里半にして椎出町あり、此れ高野登山口なり。此のあたり路や、急にして峻し。神谷を過ぎる頃、秋の日は早や半ば西山に傾けり。

嗟乎誰がいひ初めし立田の姫の織りなせる錦ごりゝの山を左手に賞しつゝ緩やかに登りぬ。眸を上げれば高野山鬱として紺青に彩色られ、碧翠濃厚天下の靈山雄然として目睫の間に迫りぬ。

神谷を過ぎて程無く見晴樓といふあり、われ疲れを覺ぬたれば入りて憩ひぬ。眺望頗る雄大なり。俯瞰せば紅葉色ざる間より蜒々として一道の山路谷間に隠れ遠く紀の川平原を開きて遙か真正面に屹然として聳ゆるは金剛山なり。紫褐色の肌膚を呈して微妙の感いふべからず。暫くにして潺緩たる溪流に架せる丹塗の橋を渡る、之を極樂橋といふ。靈俗を一溪に分つところと思へば、われ

の悲哀を思ひ、憐れ山下に残す母の客死に思ひたりては誰か涕涙の繁きを留めんや。荊萱堂を行く事しばらくにして熊谷堂にいたりぬ。蓮生坊の源空上人の門に入りて戒を受けしは此處かと思へばかの颯爽たる英雄の墨染の衣に身をやつせし姿髪髪として怪しきまで涙流るゝを禁ずるあたはざりき。奥の院に入らんとする處大同院には瀧口入道横笛の鶯梅の古跡あり。小松内府重盛の寵厚く六波羅隨一の勇者たりし齋藤瀧口が一度戀に望を失ひ浮世を無情と感じて登山なし、多聞坊と云へる庵室に佛教三昧に悟道の奥儀を極めしが、横笛の戀魂鶯と化し、まよひ來りて梅花に啼きしこ傳へられ、其の梅花を横笛鶯梅と稱し、鶯の死したる井戸を鶯の井と稱へられ、今猶存在す、優にやさしき横笛の物語限り無くいぢらし。親鸞の門に入りし佐々木高綱は、了智と號して蓮花三昧院に庵を結び、熊谷蓮生坊は持寶院に業を修め、多聞坊には瀧口入道行ひ澄ましたり。頃しも平家の一門檀の浦の荒波にあはれをこぎめし時なりき。平維盛は屋島を逃れて高野に來りて心蓮上人に請

ひて受戒し、木工允友時は重盛の遺骨を擁して來れり。あはれ今は菩提の善智識となり悟道三昧に奥義を究むれども、互に敵となり味方となりしそ時を顧れば、彼等の感慨や如何なりけん。吁祇園精舍の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、こゝ古跡を尋ね秋の哀れと散りにし平家、春の若芽と崩れ出でし源氏を思ふにいたりてはうたゝ今昔の情に堪へす。溪流に架せる橋上に立ちておぼえず感慨をもよほしたり。一の橋を渡れば此れ即ち奥の院なり。大師廟前に至る約廿町、老杉巨檜翁鬱として枝を交へ、中に一條の大路を開けり。而かも路の左右古今貴賤の萬碭幾千轉々古人を回憶せしむるもゆかしからすや。中の橋を過ぐれば嵯峨天皇の棺懸櫻あり。天皇の御棺都より飛び來りて此處に懸りしなり。姿見井は其の傍にあり。水向地藏に水をかけ、靜流に架せる御廟橋を越えて大師廟前に拜しぬ。今を去る千年の昔大師此處にて金剛定に入り給ひしなり。

## 高野の夜

曇りし空は隈なく晴れて、いつしか月は中天に

懸りぬ。夜色沈々として淡靄遠く立ちこめし杏の下道輝る月影に色黒み袂をはらふ秋風に入相の鐘を吹き送り、凄さ深山を奥の院にと逍遙りぬ。早や一の橋を渡れば樹木鬱として僅かに月のあれのみ、われは今月の淨土に入れるなり。みわたせば磊々として千萬の巨墓豈碑もる月影と當夜燈に夢の如くあはし。吁成敗興亡の迹渾て夢か。古英傑の幽魂來り會してさゝやけるが如し。水向地藏にいたれば鞆轔として岩打つ水音あたりの静寂を破りぬ。御廟橋の軒に倚れば玲瓏たる皓月玉川の清流に壁を沈めたるが如し。

われは月の淨土に再び大師廟前に額きぬ。噫偉大なる哉我が大師其の五彩燦爛たる生涯を思へば彌勒出現をとなへし大師の英靈在すが如く、暫しは頭を擧げ得ざりき。見よ眞如の月は高く中天に澄みて隅なく下界に清輝を放ちつゝあり。嗚呼大師の英靈斯くの如きか。

＊＊＊

未、七月十五日二回の御便りには、「達者で居るから安心して呉れ。水泳も年々盛大に趨いて今年は例年ない大盛況、我々も喜んで其の指導に従つて居る。身體を大切にせよ、人間に健康を保てぬやうなことでは到底成功は覺束ない。俺も一度行きたいが、何分忙しいので残念だ。けれども來年は是非行つて見たいと、今から準備して居る。君も自重して大いにやつて貰ひたい。」などと相變らず愉快な文句が紙面に躍如として、其の人の面目を示して居られたのだが、思へば之が最期の前の思出深き種となつた。先生の御宅から禮状と死去の報どが相前後して我が手に入つた時、嗚呼其の報ど如何なる自分も遂に先生は亡くなられたのだぞ。と確信せざるを得なくなつた。同時に在りし當時の面影が脳裡に歴々として畫がき出される。今更のやうに先年御暇乞の時是非にと頂戴した御寫真を取出して、机上に置いた。微笑まれた温顔を思ひ出すにつけても今は此寫真も亡き先生

## 三丙青山正郎

## A先生

我が師A先生は亡くなられたのだらうか。あの優しい容貌の若い血潮の漲り渡つて活々とした、其の元氣に我等を薰陶せられた、温厚な紳士然たる先生。何うして亡くなられたと思はれやうか。思へば思ふ程夢のやうでならぬ。八月十九日母校の所在地に、今尙勉學にいそしむK君から懐しい便りがあつたのを自分は如何に喜んだか知れない。永い間消息を缺いた親友の温情籠めた便りが、如何ばかり遠く離れて、淋しく師を懷ひ舊時を偲んでは、辛くも慰める身に力を與へることよ。何たることぞ。楽しい筈の便りは悲しみの便りであつたとは、我等は同時に入学して今日まで一緒だつた友人のO君を五月末五月雨の上らぬうちに喪つた。其の悲しみがまだ消へ去らぬのに再び杖柱と頼みきつたA先生にお目に掛ることも出来ず葬儀に列ることもかなはずお別れしたことは。六月

を語るになくてならぬものとなつた。嗚呼、A先生と呼んでも二度我等が語ることは出来ぬ。其の靈は今や何處にかさまようて、我等一同の身の將來を案じて居られるであらうに違ひない。別けてもK君や自分は先生に手を執つて教へられた一人である。あの高い教室から廣い練兵場を見下しては、互に相争つて文を書き読みなどしては先生に教訓せられた仲間なのだから、自分は一層我が身の現在を顧みて慚愧に堪へない次第である。

A先生は今年廿九歳、之からが人生行路の活動舞臺に入るといふ間際に、敢なくも病魔に其の大抱負を奪はれて、魂魄空しくなられたのは遺憾の極みであるが、之も天命とあれば我が力では如何ともすることが出来ない。自分はA先生には一方ならぬ御恩を受けた。述べんと欲して述べ得ず、云はんと欲して云ひ得ず、今は實に悲しみの頂上にある。之以上はとても此の筆には盡せぬ。が併し一つ終りに臨んで忘れてはならぬことを気が付いた。故人となられた先生の靈を安らかにするには我は何を以てすべきか。勿論先生の御教訓を銘

### 経験の光る限り

三丙鹿谷義雄

私はよく「経験」と云ふ言葉を思ひ出す。私は此をいつも懷かしく思ふ。私が凡てを棄てて絶望の底に沈みかけた時、勇めて呉れるものはいつも私の経験である。

「経験……」何んと云ふ苦味の含んだ、さうして甘味のある言葉でせう。私は此れを懷かしく慕はずには居られない。

私を迷妄から脱しさせるものはいつも経験である。

の持主はいつも経験である。永劫に不朽と云はれた孔子の教は、三千年の昔にあらゆる辛酸の雨に濡れ、残酷の焰の中に燃り、放浪の影に一生を終へた。孔子の経験にタツチした眞理の糾合であり神聖の香である。

釋迦が天上の樂園をのみ夢見て、迦毘羅城を棄てなかつたならば、佛陀は呱々の聲を發しなかつたであらう。偉大な佛教は生れず、釋尊の生命は僅かに五十年であつたであらう。併し釋尊をして人格向上の極致に迄徹底せしめ、宇宙に輝ける一切の眞理を體得せしめ、人生の凡ての苦しみと戰つてゐる人民の前で「人生は恵まれた涅槃に到達すべき自己否定である」と叫ばしめたのは、釋尊の背後の経験であつた。

「驚異によつて哲學が生れる」と云ふ様な意味の事を、往時の哲學者（アリストートルの様に思ふ）の誰かゞ言つてゐる。我々の前に漂うてゐる凡ての哲學は、我々の驚異によつて深く／＼切り込むのである。驚異は我々の経験する事によつてのみ生れる。我々から経験を除いたならば、私等

る。私の影に附纏つてゐる、謎を解くものはたがはず此である。私は経験を缺いた我等の智識を想像する事は出来ない。経験は我等を暗黒より光明へ、迷惑より悟證の界に入らしむる貴い橋である。経験は我等を涅槃の門に引きます。

神に與へられた宿命の道を歩むに、私が飽迄孤独である事が淋しい。幻影の様な未來を思つた時は寂愁に襲はれずには居られない。併し私が過去を振りかへつて見た時、プロセスの彼方に靜に／＼唯一つ墓標が立てられてゐる。経験によつて造られ、深く／＼眞理が刻み込まれて涅槃の様である。私の過去は光つてゐる。経験は瞬いてゐる。

私の最も親しい友は過去である、過去は経験は私を導くべき父母であり、灰色の未來に押し入らるべきスクリューである。未來の暗礁を打ち碎く斧はいつも経験である私は背後の経験を尊ばずには居られない。経験の無いプロセスを考へる事は出来ない。

経験の影にのみ麗はしい眞理が芽ぐんでゐる。神聖な美が露出してゐる。神祕の扉を開くべき鍵

は暗黒と迷煩の中に生息しなければならない。  
ムカツのものよりに弱過ぎるのに置いてある

私はいつも迷つてゐる。私の生は寂寞の中にのこ

つれど、學びの道に千とせを契り、いかでかな  
しからでやは。

ある夜月いと明なるまゝ、そが光に書など見て  
ありしが、物思ふ身には美しき月もいとかなしく

思はれて、またも友の墓へと志りて。

には、人生にあまりに尊い物が多過ぎる。人生は墓場であると思ふにはあまりに私の背後の経験が光り過ぎる。トルストイの様に未来に理想をのみ望み、光明をのみ見出す事は私は出来ない。然しうまは暗黒であると思ふにはあまりに過去のプロセスの彼方の墓標が照らし過ぎる。私は死にたくない。私は生きてゐたい。たゞへ人生のどん底につてゐる限り、私は寂寥な生の執着する。

亡友の墓

二乙宮田徳太郎

うつせみの世の中にあわれにかなしき事濱の真  
砂の數あれども、死にまさるものはあらじかし。  
人の命は葉末にむすぶ白露のはかなきものとはき

得す、青雲の高き希望を懷きながら、空しく二段の神にまねかれて、此の石の下にひやゝかにねむりますらむこと、いかばかり本意なく思ひ給ふらむ。思ひかへせば、われ、君が臨終の床によべりし

古城の悲しみ

二丙北川壽三

かへり、打まごろむ程に、あなうれし、あやしの  
雲は全くはれて、再び月影あざやかに洗ひたがる  
如し。

青ざめた古城の壁には、つたかづらの影と死人の頬に現れた動脈の様な、ひゞれどがは入つて居た。もう餘命の長くない虫は頼りなく聲を絞つて涙ぐんだ僕の胸にふれて泣きつゞけるのであつた。そぞろに僕は、井伊守赤鬼がしのばれるのでした。

のいたくなげき給ふさま見む事の、心ぐるしくて  
顔そむくる折しも、日は入りて月はのぼりぬ。君  
が曾ての言の葉思ひあはされて、はては月をば君  
が面影ぞしのびそめたる。あはれ末の露、もど  
の零、後れ先立つ世なりとはいへ、たゞひとり後  
れて、此のなげきにしづまむより、同じ道たどり  
て、もとの如く楽しく語りあはむや中々に、心や  
すかりなむ。あはれ空高くすめる月よ、もし心あ  
らば、なき友のみ影をうつしてみせよなご思ひつ  
ゞくれば、かなたのしのび家の中より、松風にた  
ぐへて尊き讀經のこゑするは、あはれ吾が友を吊  
ふにかと、いこたへがたきに、あやしき雲忽ちは  
しりきて、友がかたみの月さへかくしぬ。名残は  
つきじといつもながら涙の玉のみ手向けて、家に

盈ちた月は高い空に懸つて居る、氷の様に冴わ  
た光がこの廢墟にもの悲しい色をつくつて愁の色  
に静まり返つて居る、坂を上つて行くと昔のむし  
た石ころ、朽ちた樹間、叢の中に毀れた瓦、もの  
悲しい物のすべてを、ひしこ胸に抱きたい程に心  
が迫つてほろ／＼と頬に冷い涙が流れた。澄み渡  
りたる大空の月よ、お前は幾萬年幾億年の昔から